

長い春のために

オランダ

昔むかし、あるところに、お百姓とおかみさんが住んでいました。

ある冬のことでした。だんろのえんとつの中には、ソーセージやハムやベーコンが、たくさんぶらさがっていました。おかみさんは、お百姓に、

「ねえ、ソーセージを少し食べましょうよ」といいました。けれども、お百姓は、

「ああ、あれは長い春のために、とつてあるのさ」といいました。おかみさんは、心の中で、

「長い春って、いったいだれなんだろう」と思いました。

それから、おかみさんは、ソーセージやハムを食べたくなると、いつも、長い春ってだれなんだろうと考えるのでした。

ある寒い日、お百姓がよそへ出かけていたときのことです。貧しい旅人がやって来て、おかみさんに、火にあたらせてもらえないかとたのみました。おかみさんは、旅人を、だんろのそばにすわらせてやりました。

旅人は、お腹がぺこぺこでした。ふと見上げると、だんろのえんとつの中に、おいしいそうなソーセージがぶらさがっていました。

「このソーセージ、食べたいなあ」と、旅人はつぶやきました。おかみさんは、

「だめよ。これは、長い春のためにとってあるんだよ」といいました。そして、旅人の背がひよろつと高いのを見て、

「まさか、あんたが長い春なんじゃないでしょうね」とききました。旅人は、おかみさんがお人好しなのに気がついて、こういいました。

「そうだよ。わたしは長い春だよ。じゃあ、これはわたしのためにとってあったんだね。もらって行こう」

おかみさんは、

「まあ、何てうまいめぐりあわせなんでしょう。じゃあ、とつておいた物をみんな持つてお行き」といいました。旅人は、ソーセージやハムやベーコンをみんなふくろにつっこんで、戸口から出て行きました。

だいぶたつて、お百姓が帰って来ました。おかみさんは、

「さつき、長い春がやって来て、ソーセージとハムとベーコンを持って行きましたよ。」

あなたにも心からお礼をいっていたわ」といいました。お百姓は、

「何をばかなこといってるんだ。おまえ、まさか、うちのソーセージやらを、ぜんぶそいつにやってしまったんじゃないだろうな」とさげびました。

「もちろん、あげたのよ。だって、長い春のためにとっておいたんでしょ」

お百姓は、かんかに腹を立てました。そして、

「今すぐ馬で追いかけたらきつと追いつけるぞ。重いふくろをかついでいたら、そんなに速く走れるものじゃない」と考えて、馬に乗って追いかけました。

旅人は、馬に乗って走って来るお百姓を見て、きつと自分を追いかけて来たにちがいないと思いました。そこで、ふくろを、大急ぎで藪やぶの中に隠しました。そこへ、お百姓がやって来ました。お百姓は、旅人に、

「ふくろをかついだ男に会わなかったかい」とききました。

「ああ、たった今出会ったよ。大急ぎで森に入って行ったよ」

「そうか！　だけど、森の中じゃ、馬で追いかけるのはたいへんだなあ」

お百姓が困っていると、旅人はいいました。

「あんたの馬をしばらく預かっておいてやろうか」

「それはありがたい」

お百姓はそういつて馬を下り、馬を旅人に預けると、急いで森の中に分け入りました。

旅人は、お百姓のすがたが見えなくなると、ふくろをかついで馬に飛び乗り、いちもくさんに逃げて行きましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話 26 オランダ・ベルギー』小澤俊夫訳／ぎょうせい